

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：22401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14126

研究課題名（和文）日本人の死後世界観

研究課題名（英文）Japanese view of the world after death

研究代表者

白岩 祐子（Shiraiwa, Yuko）

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：40749636

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大切な人の死後に関する日本人の多様な心象を一元的に把握するための尺度（死後世界観尺度）を開発し、各因子と遺族の認知・行動との関連、および死後世界観の機能を明らかにすることであった。隣接領域や関連する文献の精査、実験、遺族を対象とする調査などから以下のことが明らかになった。

第一に、死後世界観は「霊魂の存続と共生」、「良き他界」、「生まれ変わり」など5因子構造が確認された。第二に、5因子のうち、霊魂の存続についての心象、すなわち霊魂観念が、供養の頻度・手厚さを規定していること、遺体や遺骨の保全的態度などと関連していた。第三に、死後世界観は、遺族の喪失感と関わっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の人びとは霊魂観念を受容しなくなって久しい、と指摘されてきた（山折，2011）。あるいは、自覚されない心象であるために、調査などでは抽出不可能だと指摘されてきた（波平，2004）。日本人の文化的背景に合致した死後世界観尺度をはじめて開発した本研究は、霊魂観念や死後世界観を調査を用いて測定することは、少なくとも大切な人と死別した遺族の場合、十分可能であることを明らかにした。その上で、遺族が抱く大切な人の死後世界観は、遺体・遺骨への敬意や愛着を共通して説明する認知基盤となっていること、解剖や臓器提供をめぐる名状しがたい嫌悪の背後に霊魂観念が存在することなどをはじめて実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to develop a scale (the Afterlife Belief Scale) to centrally capture the mental images of Japanese regarding the afterlife of their loved ones, and to clarify the relationship between each factor and the cognition and behavior of bereaved families, as well as the function of the afterlife belief. Reviews of related fields and literature, experiments, and surveys of bereaved families led to the following findings.

First, a five-factor structure was confirmed for the afterlife, including "survival and coexistence of the spirit," "good afterlife," and "reincarnation. Second, among the five factors, the mental image of the survival of the spirit was related to the frequency and generosity of memorial services and attitudes toward the preservation of the body and remains. Third, the view of the afterlife was related to the bereaved's sense of loss.

研究分野：社会心理学，死生学，宗教心理学，被害者学

キーワード：霊魂観念 他界観 二人称の死 死別 遺族 解剖 臓器提供 戦没者遺骨

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本人の死後世界観 人は死んだ後どうなるのか、についての心象 をめぐる従来の心理学研究には、以下の特徴がみられる。第一に、国外研究が主体であり、国内ではほとんど検討されていない。国外の先行研究は、キリスト教を主とする創唱宗教、かつ一神教を前提とした死後世界観を焦点としている (Ghayas & Batool, 2017; Osarchuk & Tatz, 1973 など)。宗教的背景が異なる日本人に、これらの知見を適用することはできない【宗教適合性の欠如】。第二に、国内で行われている検討の多くは、死後世界観の一部を扱うにとどまっている (朝日新聞, 2010; 統計数理研究所, 1958, 2008, 2013 など)。たとえば、新聞社などが行う世論調査では、死後の世界や魂の有無などを単独項目で尋ねるにとどまり、多岐にわたる死後世界観を包括的に捉えるには至っていない【包括性の欠如】。第三に、第二の点と関連して、隣接領域の知見が考慮されていない。死後世界は元来、きわめて学際的なテーマであり、宗教学、歴史学、考古学、民俗学、人類学には膨大な研究蓄積がある (川村, 2015; 岸本, 1973; 波平, 1990 など)。しかし、日本人の死後世界観研究では、こうした人文社会学の知見が参照・考慮されることが少ない【網羅性の欠如】。第四に、サンプルの多くが看護学生や大学生などに限定されており、結果を日本人全般に一般化することが難しい【一般性の欠如】。最後に、「誰の死か」が不明瞭なことである (Murphy-Morgan et al., 2019 など)。自己の死、大切な人の死、第三者の死という3区分のうち、どの立場をとるのか明瞭にした研究は限定的である(「死の人称の不明瞭さ」)。

2. 研究の目的

本研究はまず、日本人にみられる独自の死後世界観を、隣接領域の知見もふまえて幅広く構造化することをめざした(目的1)。死の人称については、もっとも真摯な死後世界観が立ち上がると予測される「大切な人の死」に着目し、また対象者を一般の人びととすることで結果の一般性を確保した。つまり、日本人の宗教的土壌に合致する、包括的かつ網羅的な死後世界観の尺度を、一般人を対象に、また死の人称を明確にした上で開発・標準化することをめざした。

そのうえで、死後世界観が日本人の死をめぐる多様な習慣や制度の維持に関わっているという仮定のもと、これらを実証的に明らかにすることをめざした(目的2)。具体的には、墓参りやお供えといった日常的な死者儀礼の手厚さ・頻度、大切な故人の解剖および臓器提供に対する抵抗感、ないし、それらに対する意味づけ、また戦没者遺骨の収容に対する態度などと、死後世界観各因子との関連を検討した。

さらに、大切な人との死別に際して、死後世界観がどのような機能を果たしているのかを明らかにすることをめざした(目的3)。とりわけ、早世・夭折した故人に対する補償としての役割や、現世では是正されなかった不公正や悪事を正す場所、すなわち社会秩序や勸善懲悪の実現を可能にする場所として死後世界が機能しているかどうか、などを検討した。

3. 研究の方法

第一段階では、関連する隣接領域から、死後世界観、遺体観、死生観、脳死、解剖、戦没者と遺族、死者儀礼、臨死体験、生まれ変わり、お迎え体験、国内外の葬送史、国内の土葬から火葬への変遷などを扱った文献を、学術書・論文、当事者の手記、ルポタージュの別を問わず精読した。これらのうち、現代の人びとも内在化していると推察された主たる内容を日本人の死後世界観尺度に反映させるとともに、上記した仮説を精緻化した。第二段階では、死後世界観尺度の開

発・標準化(目的1),および各種態度との関連を検討する(目的2)ためのオンライン調査を行った。第三段階では,死後世界観の下位概念が果たす機能を検討するため,シナリオ実験および社会調査を行った。

4. 研究成果

信頼性と妥当性を備えた死後世界観尺度の開発・標準化(目的1):日本人の死後世界観を明らかにするため,大切な人と死別した経験のある人(遺族)を対象とするオンライン調査を行い,「靈魂の存続と共生」,「良き他界」,「生まれ変わり」,「大きな存在への統合」,「記憶・記録」の5因子構造を見いだした。いずれの因子得点も正の相関関係にあったことから,故人は多様な空間に併存すること,つまり遍在性をもつことが確認された。各因子得点では性差および年齢差がみられた。これらは国内外の先行研究(Feigelman et al., 2018; Ghayas & Batool, 2017; 金児, 1990 など)と一致する結果であった。

死後世界観・各因子と死者儀礼・遺体保全への態度との関係(目的2):上記した「靈魂の存続と共生」のうち,靈魂の存続にかかわる心象(靈魂観念)が,死者儀礼の頻度や手厚さを規定していることが確認された。両変数は,「故人が死者儀礼(墓参やお供えなど)を必要としている」という認知を媒介していた。この媒介プロセスは信仰の有無にかかわらず見いだされた。つまり,お供えや墓参などの死者儀礼は,故人の靈魂の安寧を気遣う遺族の心象に規定されており,現代でもなお形骸化した慣習などではないことが示された。

また,死後世界観の各因子と,遺体損壊に対する遺族の態度との関連を検討した結果,遺体損壊(解剖および臓器提供)に否定的な遺族に特徴的な死後世界観として,「靈魂の存続と共生」が,逆に,臓器提供に意味を見いだす遺族に特徴的な死後世界観として,「大きな存在への統合」と「記憶・記録」が見いだされた。すなわち,故人の靈魂の存続をイメージする遺族ほど,解剖と臓器提供がもつネガティブな側面に目を向けやすいこと,反対に,故人は記憶や記録に生きるのみならず現代的な死後世界観を有する遺族,あるいは抽象的な死後世界をもつ遺族ほど,臓器提供がもつポジティブな側面に目を向けやすいといえる。

さらに,先の大戦における戦没者遺族を対象にオンライン調査を行い,遺骨が帰還したかどうかと,死後世界観尺度への回答を求めた。その結果,遺骨が帰還した/していない遺族は上記した5因子において有意差がみられなかった一方で,「故人の靈魂はまだ戦没地にいる」という心象のみ,未帰還遺族のほうが有意に強いことが見いだされた。

以上の結果が明らかにしているのは,大切な故人の死後,とりわけ「靈魂は死後も存続している」という遺族の心象は,故人の遺体を守ろうとする態度と関わっていること,供養という遺族の行為を促していること,そして,戦没者遺族は,遺体が戦地に放置されている限り,靈魂もまた郷土に戻ることはできないという心象を抱いていることである。

死後世界観の機能(目的3):大学生を対象とするシナリオ実験,およびオンライン調査の結果から,病死,自然死など比較的穏やかなかたちで死別した遺族の場合,死後世界は,故人が全うすることのできた人生の「延長」として存在していること,生前故人と親しかった遺族,喪失感が強い遺族ほど死後世界観も強いことが明らかになった。靈魂の存続や他界のイメージは故人への思慕がもたらす,という小此木(1979)の指摘が裏づけられた。当初,全うできなかった現世の「補償」としての死後世界を仮定していたが,夭折した故人と死別した遺族のサンプルサイズが十分でなく,この点は今後の課題として残された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 白岩祐子	4. 巻 2
2. 論文標題 靈魂觀念と墓参・お供え：大切な人と死別した遺族を対象とする調査	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 宗教 / スピリチュアリティ心理学研究	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.60238/jjpr.2.1_7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 白岩祐子	4. 巻 94
2. 論文標題 遺族の死後世界観と解剖や臓器提供に対する態度：死後世界観尺度 (2人称) を用いた検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 413-422
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.94.22219	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 久家健太郎・白岩祐子	4. 巻 19
2. 論文標題 アニミズムとホーディング (溜め込み) の関連性：溜め込むモノの種類に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.19.25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 西菜々子・白岩祐子	4. 巻 25
2. 論文標題 死者は美化されるのか：親密な他者の死の想像が性格評価に及ぼす影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 死生学・応用倫理研究	6. 最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsutsumida, K. & Shiraiwa, Y.	4. 巻 18
2. 論文標題 A study of the death positivity bias in the evaluation of a painting.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.18.31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり	4. 巻 36
2. 論文標題 形見の意味と故人との継続する絆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.1813	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 白岩祐子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 301
3. 書名 宗教が拓く心理学の新たな世界	

1. 著者名 白岩祐子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 318
3. 書名 入門 司法・犯罪心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究者ホームページ：研究

<http://yukoshi-raiwa-rana.jimdo.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6/%E6%9F%BB%E8%AA%AD%E3%81%A4%E3%81%8D%E8%AB%96%E6%96%87/>

白岩祐子の研究・教育ページ

<https://yukoshi-raiwa-rana.jimdo.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6/%E6%9F%BB%E8%AA%AD%E3%81%A4%E3%81%8D%E8%AB%96%E6%96%87/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------